

柘二と尾鷲

——『獨石馬』『尾鷲』紀行——

達知 和子

今、改めて宮柘二の第八歌集『獨石馬』を繙く。柘二六十三歳の誕生日に、白玉書房より刊行された一冊である。昭和四十一年から四十七年までの七年間、五十三歳から六十歳までの作品一二三二首が収録されている。この歌集には、尾鷲で詠まれた九十二首が掲載されており、熊野で育った私にとって、親近感を覚える作品群となっている。

そもそも柘二と尾鷲。柘二は前々から紀州の地に憧れを抱いていたという。師である北原白秋の持つ「南国の光」への憧憬と、釈迢空（折口信夫）の「岬がくに」への誘い。加えて古代からの紀州、熊野の歴史に魅かれていたと……

昭和四十四年八月には、尾鷲で「コスモス」の第二大会が開催されている。尾鷲という僻遠の地での開催自体、柘二の強い気持がなければ実現しなかったであろう。大会の講話で柘二は尾鷲の人柄につき、繰返しこう述べている。「遠い、施設が少ない尾鷲で何故やったかという、私個人の見解ですが、尾鷲の人柄が非常に好きです。」と。そして「お帰りの時には、尾鷲も見ていただく、人柄も風景も。人柄は、風景から、立地条件から、生活環境からも培われるのでしょ

うが、そのよさは何から培われたのか、皆さんはそれを感じとっていただくとありがたいと、私はひそかに思っております。」と。

『獨石馬』（尾鷲(四)土井竹林）に、

秋霖^{あきづゆ}雨に見しかの日より土井のこの大竹群
を恋ひ恋ひてきぬ

の一首がある。「かの日」とは、昭和三十九年秋、和歌山に招聘され、翌日出迎えの仲宗角と尾鷲での市内散策に出た。夕方近く、土井竹林を訪ねた柘二はその風情を喜び、「寒の日にもう一度」と言われたのだ。

そして実現されたのが、昭和四十一年二月の吟行の旅であった。『獨石馬』（尾鷲(一)）の詞書には、「コスモス編輯同人十二名、二月四、五日、共に三重県尾鷲市に赴いた。仲宗角君の案内で、竹林、鰯漁を見ようといふのが目的である」と書かれている。この吟行、同行した人達に柘二は百首詠の課題を出し、自ら実践する形で、『短歌研究九月号』に「たぶの木」百首を発表。後に「尾鷲」と改題され、「尾鷲(一)」二十六首、「尾鷲(二)大庄屋文書群」五首、「尾鷲(三)寒鰯漁」二十三首、「尾鷲(四)土井竹林」十九首、「尾鷲(五)井戸と檜林」八首、「尾鷲(六)柑畑」十一首で構成された九十二首が、『獨石馬』

に収録されている。当初の「たぶの木」のタイトルについては、柁二が宿泊した旅館から浜に下った所に大きなたぶの木があり、潮の照り返しの光につつまれた様子が余程印象に残ったのであろう。

柁二は発表すること、推敲を極めた。初出百首から歌集上梓に至る九十二首も、原作のままが二十三首、推敲歌が六十九首であり、八首は削除となった。(尾鷲^(一))の収録歌より、推敲例をいくつか挙げてみよう。△印は「たぶの木」初出歌、○印は推敲された歌とする。

△この町の祭なる日に来遇ひけり土井の竹林
見んときたりて

○祭なる日に来遇ひけりこの町に大竹群を見
んと欲りして

△人の投げし錢の落付く音聞けり箱落ちてゆ
くその音ののち

○老の投げし錢の落着くかすかなる音も聴き
をり風のまにまに

△透く紙に霜囀して浜木綿を二月の寒き日に
当らしむ

○透く紙に霜囀して浜木綿を軒の二月の日に
当らしむ

語順を変え、またことばを推敲することにより、その場面がより鮮明に立ちあがり、詠む対象への作者の心情が深みを増すなど、その効果を味わうことができた。また歌にある「祭」とは、毎年二月一日から五日まで開催される尾鷲神社

の「ヤーヤ祭」を指す。戦国時代の武士が立合いの名乗りをあげる「ヤーヤ我こそは」に由来すると伝えられ、期間中勇壮な「ヤーヤ」の声が市中にあふれる。

もうかなり前となるが、伊勢で全国大会「コスモス第三大会」が開催された折、北海道の歌友の皆さんと当時コスモス選者の仲宗角案内のもと、尾鷲に柁二の歌枕を訪ねる機会を得た。

柁二の「中村山公園歌碑」は中村山の頂上、北東の位置に立つ。中村山は尾鷲市街地の中央にあり、戦国時代には尾鷲を守る砦であったが、今は天文台あり、遊具ありの市民憩いの場となっている。柁二直筆の一首が彫り込まれており、歌碑、台座共に大振り立派なものだ。歌碑は四国産の伊予青石、台座には紀州産の那智黒石が敷き詰められている。昭和五十六年秋除幕、建立は仲宗角を中心とした「コスモス短歌会三重支部」、全国で五番目の柁二歌碑だ。

『獨石馬』(尾鷲^(二)寒鰯)では、
熊野灘いま昇りきし朝の日は波のおもてに
くれなぬ流す

であったが、歌碑建立に際し、
熊野灘いまのぼり来し朝の日は洋のおもて
にくれなぬ流す

と推敲された。「波のおもてに」を「洋のおもてに」とされたことにより、熊野灘のスケールがぐっと力強く表現されたのでは。また山上に立つ位置も考慮されたことだろうか。一部漢字、仮名の表記を変えられたのも、歌碑の姿を想像さ

れての結果ではと思われる。

この時柀二六十九歳、糖尿病、関節リウマチの悪化、また脳血栓で倒れ、手足や発音さえ不自由となられた宿阿に苦しみ時期であった。柀二は歌碑に刻む書を、下敷の毛氈を墨塗れにして書かれたとのこと、原寸大と言うから、まさしく渾身の力を振り絞つての揮毫であつたらう。墨が飛び散つた原書は、仲宗角のもとに保存されている。

北海道の歌友は、持参された地酒「男山」を歌碑に捧げた。その香が流れ来る歌碑前で、私達は写真に収まつた。「先生、お酒は美味しいですか。よかったですね」。仲は改まつた口調で語りかけた。

『獨石馬』の「尾鷲」一連は、柀二が一地域を詠んだ中では他に例を見ない鞆旅詠の大作であり、作品を語る上でのひとつの位置を占めるものと捉えて差し支えなからう。退職され、作歌一本の生活に入つて後の歌集であり、『藤棚の下の小室』、『忘瓦亭の歌』と共に、鞆旅詠が多く見られるが、通り一遍の観光的な詠みでなく、眼前にある対象への緻密な観察及び対象を射通さんばかりの鋭さを、澄み切つた抒情で裹み、後世へと語り継ぐ社会詠の要素を兼ね備えている。

尾鷲の人柄が好きだと言いつつ柀二。

学帽を横被よこかぶりして生意気にあどけなき中学生
三人の来くる

「尾鷲(一)」からの抽出歌だが、この頃近辺の中学校でも結構荒れていたのを思い出す。服装を乱し、町を闊歩する中学生の姿にも、柀二の優しいまなざしが感じられる。

古き代の賦役を村別人別まへべつにこまごまと此処に書き遺したり

預け人は浦上キリシタンにて「さを七歳」

「けい三歳」の童名も混る(尾鷲(二)大庄屋文書群)

膨大な大庄屋文書は、市の中央公民館書庫に保存されている。私達は柀二の歌に詠まれた対象文書についての説明に聞き入つた。キリシタン弾圧の世に、隠れキリシタンを受け入れた尾鷲。実質的には大庄屋が分担して。尾鷲の人達が親切に相対したため、逆に疑われ、わずか半年で他の地に移すことになつたとか。こうしたキリシタン受け入れの記録、相對死(心中)や喧嘩の記録など、中には虫喰いも見られたが墨の文字ははつきりと残つていた。壁一面を埋める文書群、柀二はここで二時間余読み入つたという。

中国の湧井わづみに模せる手桶径水位は青くその縁ふちに至る

聞きてゆく尾鷲林業史その中に土井氏の姓の度たま遍ねく出づ (尾鷲(四)井戸と檜林)

手桶径は「土井本家湧井井戸」の地上から井戸の水面まで降りる傾斜径で、手桶で直に水が汲めるようになっており、中国江南地方の井戸様式を模したものと伝えられている。この井戸を舞台とした柀二のエピソードは、エッセイ集『私の棚の中』の「私の棚の中」の項に、かなりの字数を連らね、「土井苞所持家納屋之鍵」が柀二自宅の部屋の地袋にある経緯が詳述されている。「長閑かな気分分で井戸のわきに休憩し、何となく見上げたとき、井戸の柱に用無げに掛けられてあつ

た」古鍵だ。

臨海の工場群の破棄しゆく水が魚類を寄ら

しめぬとぞ

一尾の鰯とれざりし鰯漁場に立ち荒るる波

ただ白しらし

(尾鷲(三)寒鰯漁)

柁二二行は二日目の二月五日、三時に起床、九鬼岬沖の鰯大敷をあげる様子を漁船に乗って見学した。九鬼は「九鬼水軍発祥の地」とされ、天然の良港を持ち、近くの島勝、錦と共に、紀州路の三大鰯漁場として栄えた海沿いの町である。柁二の視線は世相を写し、光景の背後にある人々の暮しやその心に向けられている。

黒雲母花崗斑岩のあひだを耕して柑柑の木を育てゆくなり

蜜柑山に入植せしは漁師の寡婦、引揚者の

末、紀州の二男三男坊

(尾鷲(六)柑柑畑)

「仲君が施肥の指導をしる声柑柑の木の下にて聞こゆ」の一首もある。昭和三十年代後半、県のパイロット計画により開拓された蜜柑山。岩山相手の難事業であったと聞く。柁二が受け止めた開拓人の辛酸の実態が胸を突く。

南より貫く隧道に北谷の土井の竹群鎮まりて見ゆ

この竹を筏に浮子に用ひつつ漁業に抛りし浦の村々

幹打つに節の中なる反響は古竹ゆゑに短くて止む

(尾鷲(四)土井竹林)

柁二が恋い恋いて訪ねた土井竹林。先にも紹介した「私の棚の中」に柁二は書く。「土井の竹林というのは、土井家の竹林の意である。土井家の祖、土井嘉八郎が宝暦年間に薩摩より江南竹を移し植えたのが最初の由で、この地の地質、氣候、環境が竹と合つたらしく、素晴らしい竹林に成長した。」と。市の文化財指定のかの古井戸を進み、やがて剝り貫かれた隧道に入る。柁二の歌にあるように、隧道から竹林を臨むことに。この隧道は鰯漁に使用する浮きや筏に使う竹を、土井竹林から貰った漁師達が、そのお返しにと奉仕作業によりできたものらしい。青竹の直立つ竹林に入り、柁二は何本もの竹を叩いてみたのだ。

仲宗角に案内を請い、訪ね歩いた柁二の歌枕の地、その一首一首をより深く鑑賞できる体験となった。そして、清澄な内面の奥処から来る緊張とゆらぎを発信する。柁二の歌の力を改めて認識することとなった。四度尾鷲を訪ねた柁二、その都度尾鷲の人々や自然と心と心で触れ合ったに違いない。

今春三月三日、私は久しぶりに尾鷲を訪ね、柁二歌枕の地をなつかしく歩いてみた。あの頃の場面場面が次々に立ちあがってきた。尾鷲神社の河津桜は満開で、上着無用の暖かさだった。尾鷲を訪ね来るうたびとを笑顔で案内してくれた仲宗角は昨年暮れ、十二月二十五日に亡くなられた。宮柁二と仲宗角。二言目には「宮先生」の言葉が出て、柁二に傾倒し続けたその生涯に思いを致す一日ともなった。柁二の「尾鷲」の歌と共に。